

記者レク概要

日時：平成 23 年 4 月 7 日 (木) 11:00~11:50

場所：東京電力本館 1 階 101AB 会議室

先方：記者約 50 名 (カメラ 6 台)

当方：原子力設備管理部

原子力運営管理部

広報部

配付資料：

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて【4月7日 午前9時現在】
- ・福島第一原子力発電所 1～3号機プラント状況
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について (第十三報)
- ・福島第一原子力発電所2号機取水口付近からの放射性物質を含む液体の海への流出について (続報3)
- ・福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について (第十五報)

質疑：

Q. 1号機の窒素注入量はどのくらいか。

A. 当初、14m³/hの注入装置で開始し、その後1台追加し、現在、28m³/hで注入中。3台目を追加するとしたら今晚以降になると思われる。これまでの総量は9:50時点で焼く210m³

Q. どのように評価しているのか。

A. 順調に圧力が上がっており、PCV内へ窒素が注入されていると考えている。また、環境放射線モニターの有意な変動もない。引き続き、256kPaを目標に注入してまいりたい。

Q. 6,000m³を6日で注入するということか。

A. 注入開始時から100kPa上昇した時点で停止する予定。概算で約6,000m³になると考えている。

Q. 2号機の立坑はいつから上昇しているのか。

A. 昨日の朝から本日の朝にかけて5センチ上昇した。

Q. 増えた水は管路内の水がリターンしたということか。

A. 海に放水されていたのが停止し、原子炉建屋→タービン建屋→トレンチと移送して増加したのと考えている。

Q. 2号機立坑周辺の雰囲気線量に上昇はみられるか。

A. 上昇したとの情報はない。

Q. タービン建屋内の水位は。

A. 現場に行ってカメラで確認しないとわからない。

Q. タービン建屋内の作業は実施中か。

A. 作業を中止しているわけではないが、現場を確認する程度の作業予定しかない。

Q. タービン建屋内の線量ほどのくらいか。

A. 場所によって異なるが、高いところで100mSv/h程度あるのではないかと。

Q. 放射性物質の封じ込めについて検討していることはあるか。

A. 復水器や集中環境施設へ排出することを検討している。

Q. タンクの容量は足りるのか。

A. 必要に応じて検討しているところ。作業を進めながらタンク容量についても検討しているところ。

Q. 集中環境施設への移送はいつ頃になるのか。

A. 残り2,000トンの内、4/7・7:30の時点で焼く1,300トン进行放水、5、6号機サブドレンの排水については、トータルで約800トン排出している。排水後、止水処理を実施予定。

Q. NISAの情報によるとトレンチ水位があがった後、再び下がったとの情報があるが事実関係は。

A. 確認させていただく。

Q. ピットの止水工事について、最初から凝固剤の注入をしなかったのはなぜか。最初から実施していれば放射性物質の放水量も少なくて済んだのではないか。

A. 時間がかかってしまったことは大変申し訳ないと考えている。碎石層からの漏水の可能性も考えてはいたが、まずは可能性が高いと思われる管路からの止水を検討し、対策を打った。

Q. NISAによると、窒素封入の際、水素燃焼が発生した場合、敷地から 20 キロ地点の外部被曝が 0.028mSv、内部被曝が 1.3mSv と評価しているとの情報があるが事実関係は。

A. 確認させていただく。

Q. 2号機と3号機の窒素の封入予定は。

A. 検討中。

Q. 1号機の水位を慎重に見極めた上で実施するということか。

A. そうなることと思う。

Q. 止水場所の雰囲気線量は作業上問題なかったのか。

A. 作業にあたっては雰囲気線量を測定しているが、数値については確認させていただく。

Q. 鉄板を立てかけるのは7つある門をすべて塞ぐのか。

A. 各門はすべてつながっているため、7門ともつながっている。

Q. NISAによるとともと定検時に塞ぐための鉄板を置いていたものが津波で流され、それをまた使うとの情報があるが事実関係は。

A. 定検時に取水口を塞ぐための鉄板は運転時には仮置きしておくものの、津波で流されてしまった。今回立てかけるのは別の鉄板である。

Q. 窒素封入にあたっては、64条に基づく危険回避の申し入れがあったとのことだが正しいか。

A. 正しい。

Q. 周辺地域への説明は東電として実施したのか。

A. 実施した。

- Q. 具体的に水素爆発の際の影響等についても説明したのか。
- A. 内容までは把握していない。
- Q. 1～3号機タービン建屋たまり水の核種分析の状況は。窒素注入にあたって炉心の状態を見るためにもたまり水の分析を実施するのは当然ではないか。
- A. 現在、分析を進めていると思う。
- Q. 1号機の炉圧が0.758MPaに上昇しているのはなぜか。
- A. 6m³/hと注水量を絞っているので多少上がっている。様子を見守っているところである。また、RPVの設計仕様圧力は7MPa以上あるので特段問題ないと思われる。
- Q. NISAの情報によるとPCV内に水があることがわかったので窒素の注入量が減りそうだとの情報があるが、事実関係は。
- A. 注入量に対し、圧力の上昇が早いので、気相部分が少ないと思われる。
- Q. プルトニウムの周辺地域の調査についてはどこまでの範囲を実施していくのか。
- A. まずは構内にて調査を実施する。今回サンプルを取得した3カ所については継続調査していく。
- Q. 1F5～6号機放水口北側の放射能濃度が4日以降上昇傾向にあるが、海洋放出との関係はどうか。
- A. 放出した影響かどうかは現時点で何とも申し上げられない。引き続き観測してまいりたい。
- Q. 1F2のパースクリーン濃度が止水後若干下がっているが止水による効果と見ていいか。
- A. まだ判断が出来ない状況。今日以降のデータをよくみてまいりたい。
- Q. 1F-2の取水口は下がり傾向である一方、5～6号機は上がり傾向であることから、総合的に見て、海洋放出の影響であると考えられないか。
- A. すぐに判断できない。
- Q. 3月14日の燃料損傷率が報道されているが、現状どの程度か。

A. 3月14、15日時点での値を示したが、燃料損傷率は格納容器内のガンマ線から算出するもので、時間の経過により損傷率を過小評価してしまうことから改めての評価は行っていない。

Q. なかなか作業が前進しないが、現地でもっとも苦勞している点は何か。

A. 線量の関係での限られた作業や作業人数など現場は大変厳しい環境にある。まずは炉心等を冷やし安定させることに注力してきた。その次に、線量の高い水が流出するなどの状況の中、流出経路を特定し短期間で確認して解決していくことについて傾注していきたい。

Q. 次のステップについて検討は重ねているか。

A. 記者の皆様には断面での報告となっているが、平行して次の策について検討をしており、海外の方々や国の方々など、大変多くの皆様のご協力をいただきながら検討を重ねている。

Q. 作業の全体像が見えてこないが。

A. ご指摘は過去にもいただいており、出来るだけ皆さまにご安心いただける情報を出せるようにしていきたい。

Q. 工程表を出していただければ安心情報となるので、是非ともお願いしたいと以前より要望しているが、なぜ出せないのか。出せないのであれば、その理由を説明してほしい。

A. 出来るだけ早くお示しさせていただきたい。

以上

本店レク 議事メモ

日時：平成23年4月7日(木) 22:05~22:20

場所：東京電力本店1階101AB会議室

先方：記者約50名(カメラ6台)

当方：原子力設備管理部

広報部

配付資料：なし

Q. トレンチの水位変化がないとのことだが、今朝との比較ということによいか。

A. そのとおり。

Q. ラドのたまり水の移送終了見込みは明日の午前か午後か。

A. 未定。

Q. 3号機のたまり水の移送が遅れているのはなぜか。満水のとほなしもあるが。

A. マンホールを開けるところで止まっているようだ。原因は確認する。

Q. ラドのたまり水の移送は14:00時点で残り300トンとのことだったが、そろそろ終わる頃ではないか。

A. 残り水のため、時間がかかっているのかもしれない。

Q. 明日の電気系統の作業予定は。

A. 何か大きな動きはなく、健全性の確認や清掃など。

Q. メガフロートはいつ1Fに到着予定か。

A. 横浜での点検に1~2週間かかるため未定。

Q. 窒素の注入量は。

A. 17:00時点で4.13m³。

Q. どのくらいのペースで窒素を注入しているのか。

A. 28m³/h。

Q. 窒素の注入に伴って周辺の線量に変化はあるか。

A. ない。

Q. 炉内の圧力はどうなっているか。

A. 17:00時点で176kPa。

Q. トレンチの水位が変動しているとの保安院の情報があるが理由は。

A. 変化はないと認識している。

以上

会見議事メモ

日時：平成 23 年 4 月 7 日 (木) 18:30~20:00

場所：東京電力本館 3 階 大会議室

先方：記者約 60 名 (カメラ 11 台)

当方：原子力立地本部長代理

原子力設備管理部

原子力運営管理部

本店広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて (4月7日 午後4時現在)
- ・ 1号機主排気筒における微量なヒ素と思われる放射性物質の調査結果について (続報)
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・ 福島第一原子力発電所 1~3号機 プラント状況

質疑：

Q. 窒素注入量について教えてほしい。

A. 413m³ の注入を行った。

Q. 予想以上に S/C に水があって注入量が少なくなるのではないかとのことだが事実関係は。

A. 当初想定よりも少し高めの圧力の上昇がみられ、当時想定していた空間部の体積が小さく、水の量が多いのではないかと。計測器の方が十分ではないことから、圧力が +100MPa となったところで終了としたい。

Q. NISA によるとトレンチの水位があがったとのことだが事実関係は。

A. トレンチの水位については、+5cm という報告を受けているが、私どもとしては下がったという報告は受けていない。何らかの情報の齟齬があったのではないかと、確認させていただきたい。また、トレンチ水位はあがったがタービン建屋側での上昇はみられていない。

- Q. 外務副大臣が今回の事故について海外メディアの報道には誇張があるとの発言が行ったが、海外メディアでは、政府、東電は何かを隠しているといっているがどうか。
- A. 私どもとしては、現時点でわかっている情報を速やかに正確にお出ししたいと思っている所存。
- Q. 勝股会長は地震発生当時、マスコミOBをつれて中国旅行に行っており、社名と名前を回答すると言っていたが、どうか。
- A. 先般、勝股が申し上げたとおりに、会費制で相手先もあることから確認させていただくと申し上げた。現時点で確認中であり、先方からご了解をいただいていることから、今回はご理解願いたい。
- Q. 2万円で中国に行けるとは思わないが、
- A. 金額については申し上げられない。
- Q. マスコミとの癒着であるとの声もあるが、
- A. ご意見として承りたい。
- Q. 窒素封入について、格納容器内にたまった水とは、注水で漏れた水と考えているか。量ほどの程度か。
- A. 格納容器にたまっている水は、S/Cに蓄えた水、注水の際、損傷があつて漏れた水などが考えれるが、計測器がはっきりしていないため、定量的な把握はしていない。
- Q. 窒素封入についてはNRCが指摘したとの話があるが、格納容器に水がたまっていると耐震性に問題があるとも指摘しているがどうか。
- A. 耐震性については、格納容器の水の量、損傷の程度がはっきりしないので、検討に至っていない。
- Q. 検討の予定はあるのか。
- A. 今後の格納容器の健全性の評価で実施していきたい。
- Q. 圧力容器底部に穴もしくは亀裂があり、水が漏れているのではないかと。28日は圧力容器の底部に穴が開いているイメージ、という発言があり、先日、京大の教授にインタビューしたところ、圧力容器そのものに穴が開いていることは間違いない、との発言があった。汚染排水を流したことに対する

道徳的避難、そうなった根本的な部分を認めるか、補修が聞くものなのかどうか。

- A. 圧力容器の損傷については、現時点ではっきりしたことが申し上げられる段階にない。ただし、燃料が損傷し、各生成物がたまり水として発見されていることを鑑みれば、格納容器から圧力容器へ、圧力容器から原子炉建屋へ、漏えいしたと考えられる。小さい配管等が損傷を受け滲れていることは考えられるが、圧力容器自体が損傷しているかどうかは現時点で不明。
- Q. 外付けの冷却装置を設置すれば、冷却系を再構築することができるというプランがあるという発言がある。この点を検討しているかどうか。
- A. いろいろな手段を検討している段階にある。外付けの冷却装置や、現存の危機の復旧、仮設の海水系ポンプからの冷却など様々な方法を検討しているが、まだはっきりしていない。
- Q. もはや国内のみの問題ではなく、世界に対してどのような復旧プランがあり、各プランの一長一短を伝えるような説明をすべきではないか。
- A. まさにどのようなプランがあつて、どのように対応するか政府と対応を検討しているところ。
- Q. 時期について約束していただきたい。
- A. 責任は感じているが、現時点で皆さまにお示しできる段階ではない。
- Q. 社長が復帰しているが、どのような状況か。
- A. 社長の清水は本日午前より出社、これまでの状況を整理するとともに、福島第一支援室本部長として、今後の支援のあり方などについて協議を進めているところ。統合本部にも状況を見て参加する予定。
- Q. 東電全体の指揮を執っているのは勝股会長であつて、被災者支援室は清水社長ということか。
- A. 今日のところはそういうことである。
- Q. 燃料棒の損傷について、3週間たつて、さらに破損が進んでいるのか。破損している場合とそうでない場合について冷却の違いはあるのか。
- A. CAMSでおよその推定をしているところ。その後の状況については原子炉停止からの残留熱の状況やそれに見合う注水を実施することで、冷却のバランスがとれており、破損が進んでいるような状況ではないと思われる。

現時点では大きな放射性物質の放出は進んでいないことから、冷却に問題ないと思うが、樂觀できない。

Q. 汚染水の計画排水の終了時期は。

A. 集合環境棟については、明日排水が終わる。5、6号機は明後日に終了予定。その後、タービン建屋のたまり水の復水器への移送などを実施する。来週以降は仮設タンクやメガフロートに貯蔵させていきたい。

Q. 低濃度汚染水と高濃度汚染水の定義の違いは。

A. 以前からお問い合わせをいただいているが、法律上の定義があるわけではなく、現在タービン建屋地下にたまっている10の6乗レベルの水を高レベルと呼んでおり、10の1乗、0乗といったレベルについては便宜的に低レベルと呼んでいる。

Q. それは国際的に理解が得られると思うか。

A. 当社の使い分けである。

Q. 1F、2Fの設計図面は東京電力に存在しているか。

A. 現存している設備の図面は存在している。

Q. 緊急炉心冷却装置の設置を提案しようとしたところ、東電から図面を出してもらえないということがあった、これはなぜか。

A. この経緯については把握していない、後ほど回答する。

Q. ■教授が、自然循環式の冷却装置があったはずだと言っているが、実際にあったのか、働かなかったのか、はずしたのか。

A. どういった趣旨で自然循環式の冷却装置を指したかわからないが、そういった設備についてはないのではないかと。

Q. 現地作業員の安全安心を守っていかなければならないが、造血肝細胞を事前に採取しておけば、万が一の時も治療が楽になるので、作業員に対して、事前に採取、保存するという考えはあるか。

A. 現在の放射線管理については、250mSvで管理している。造血肝細胞の管理については、もう少し大きい値の放射線を浴びた際の対応と思うが、現時点では、上限を厳格に守っていきたい。

- Q. 浜岡原子力発電所で働いていた社員では年平均7mSvで白血病が発症し死亡、労災認定もおりました。250mSvを厳格に守るでは足りないのではないかと。
- A. 国とも協議しながら厳格に対応してまいりたい。
- Q. 再臨界が原子炉内で起こっているのではないかという声があるが、どうか。ヨウ素131の量がすでに10分の1以下になっていなければならないのだが、未だに横ばいで、クロムが検出されているのはなぜか。
- A. 現在発電所の周辺で測定している中性子線は検出限界未満のため、再臨界は起きていないと思われる。
- Q. 放射性物質の定例的な発表はしないのか。
- A. 測定翌日に速報値として主要3核種をお知らせさせていただくことに取り組んでいるところ、その他については、第三者機関に依頼しているところ。
- Q. 放射能についての東京電力なりの評価はどうか。日本からの輸入規制が始まっているが、東電からのコメントをいただきたい。また、清水社長がメディアの前に姿を見せないが、なるべく早くメディアの前で会見を行うべきではないか。
- A. 何らかの評価について検討を進めている。測定する都度、結果が変動するため、現時点では情報出し方、評価の仕方については検討している。
- Q. どれぐらい時間がかかるのか。シミュレーションを行ったり、実験を行ったりしていないのか。
- A. 皆さまにお伝えできるような準備が整っていない。
- Q. 会社の方針等の大きな質問が出ているので、役員の方など、意志決定ができるかがスピーカーとなるような会見の予定はないのか。
- A. ご意見として承り、検討させていただきたい。
- Q. 避難者に対する生活支援等についてはどうか。
- A. 避難地域にはお見舞い金をお渡しさせていただいている。60-数カ所の避難所に当社社員が張り付き、心ばかりのお手伝いをさせていただいている。
- Q. 個別にお支払いをする考えはないのか。
- A. 現時点では、自治体を通じて気持ちを伝えさせていただいている。

- Q. 復水器だけでは足りないと思うが、いつの段階でどこに移そうとしているのか。
- A. 目安についてはなかなか申し上げられないが、タービン建屋の高濃度の汚染水はホットウェルへ移送することを考えており、集中廃棄物処理建屋には3万m³の容量があると考えており、まずは集中廃棄物処理建屋の排水、点検をしまいたい。
- Q. 排水の作業をみつつ、これがうまくいかなかったら、外付けの仮設システムを作ると言うことを考えているのか。
- A. 仮設のタンクについては先月23日以降に順時発注、製造に時間がかかる関係もあり、来週の後半以降、順次据え付けを行っていく。タンクへの移送については総合的に水の取り回しを考えていきたい。
- Q. 統合本部副本部長に勝俣会長が就任したのはいつか。それに伴い清水社長は退任したのか。
- A. 4月1日付で勝俣が統合本部の副本部長に就任している。当面は勝俣が副本部長を務める。
- Q. 2号機ピットからの流出量の特定は出来ないか。少なくともこれぐらい、という目安等がかまわないが。
- A. 流出が始まった時間や量が特定できず、難しいとお伝えしてきたが、検討をさせていただきたい。
- Q. 3月23日にタービン建屋にたまり水が見つかり、24日に発表したが、その時点で高濃度の汚染水の流出を想定していたか。
- A. タービン建屋のたまり水を発見し、流出について監視を行ってきたが、そこからどのように検討を行ったが、詳細は確認させていただきたい。
- Q. 集中廃棄物処理施設からの放水をどの時点で想定していたか。
- A. 集中廃棄物処理建屋からの放水は、当初4号機のタービン建屋に移送しようと考えていたが、4号機に移送したところ、3号機にまわって水位上昇が見られたことから、これを断念したものの。
- Q. 現在、1日あたりどの程度の漏水があると想定し、その対応をしているのか。

- A. 漏水については、現時点では注水の量と蒸発の量がバランスしていると考えており、タービン建屋に流れ込む水量は増えていないと判断しているが、仮設タンクやメガフロート等の調達を進めているところ。
- Q. これまで、持ち帰った宿題で回答をいただいているものがあるが、きちんと管理しているのか。宿題のリストを再確認させていただきたい。
- A. 宿題については、個別に対応させていただいているのでご理解いただきたい。
- Q. 仏アレバ社が技術支援については、具体的な提案内容は、アレバ社は汚染水の処理に定評があるが、どのようなところに期待しているか。
- A. アレバ社から技術支援をいただけることとなっている。高濃度の水の処理についての支援をしていただくことで協議しているが、具体的な内容については検討中。
- Q. 2号ピット以外に漏水箇所は見つかっていないのか。
- A. ピットからの漏水は昨日止まっているが、セメント注入による周辺の地盤改良を引き続き行っているところ。また、止水したことで、縦坑の水位があがってくることや周辺地盤への染み込み等が考えられることから、水位の監視を行っている。また、予想外のところから漏水が生じることがないように、鉄板を設置し拡散しないための対応や、周辺にシルトフェンスを設置するなど、汚染水の流出を止めていきたい。
- Q. (作業員の体調不良についての報告を受けて) 搬送された作業員の線量は。
- A. 被ばくはないと聞いている。
- Q. 塩素 38 は検出されているのか。
- A. 検出されていないと考えているが、今後専門家のご意見を伺いたい。
- Q. 64 条を適用した放射性物質の海への放出がなぜ必要だったのかについて、役員レベルの方に会見していただきたい。
- A. 検討させていただきたい。

以上